

令和元年6月26日現在

機関番号：11401

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2018

課題番号：16K13255

研究課題名(和文) 小学校英語科における異文化間コミュニケーション活動のデザイン、指導方法、評価方法

研究課題名(英文) Design, Teaching Method, and Evaluation of Intercultural Communication Activities for Elementary School English Education

研究代表者

佐々木 雅子(島崎雅子)(Sasaki (Shimazaki), Masako)

秋田大学・教育文化学部・教授

研究者番号：00292392

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本の英語教育の始点が小学校英語科に降り大きく変わろうとしている中、「グローバルに発展する社会に対応する一方策としての異文化間コミュニケーションは、英語教育のカリキュラムの中でどのような位置にあり、そしてその意義は何か。」というテーマの下で行われた。理論的枠組みをByramのintercultural communicative competenceに置き、1)異文化間コミュニケーションという場としてのSkype接続による合同授業が小学生に与える影響、(2)絵本を活用したタスクのデザイン、(3)地域と連携した短期集中型の異文化交流実践プログラムの3点について研究を実施した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「異文化交流と言語習得が表裏一体となった授業作りの体系化」を行うことを目指した本研究は、異文化の捉え方や活かし方について十分に研究されていない外国語教育において、異文化交流により言語能力を育成しようとする指導方法を追究した点で、学術的意義を持つ。また、本研究の実践は、地球規模で活動することができる人材育成の教育的指導方法として捉え直すことができること、さらに、外国語学習者がコミュニケーションを行いながら自律的に目標とする外国語能力を伸ばす可能性を提示した点で、社会的意義を持つ。

研究成果の概要(英文)：This research was conducted under the theme of "How is intercultural communication perceived as one of the ways to adapt to a globalized society situated in the curriculum of Japanese elementary school English education? And what is its significance?", facing the changes of its starting point to elementary school. The theoretical framework of this research is Byram's intercultural communicative competence. The content of research was mainly divided to investigate into the following three: (1) influence of intercultural communication via Skype on elementary school students, (2) task design with picture books, and (3) intensive short-term intercultural exchange program.

研究分野：応用言語学

キーワード：異文化間コミュニケーション能力 小学校英語 異文化交流 第二言語習得 授業デザイン タスク
絵本 自律的学習

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

2013年12月13日に「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」が公表され、2014年9月26日には、英語教育の在り方に関する有識者会議による改革案が五つの提言としてまとめられた。特に、小学校高学年における英語教育の教科化については、大きな変化であるだけにその効果が期待されていた。しかしながら、活動デザイン、指導方法、評価方法についての検討は端緒にいたばかりであることは否めない状況であった。平成28年度学習指導要領改訂、平成30年度段階的先行実施、平成32年度全面実施というスケジュールを考えると、本研究期間は非常に重要な準備期間であった。この準備期間に、実際の小学校高学年児童を対象として、活動デザイン、指導方法、評価方法についての実践的研究を充実させ、その結果を先進的な取組に反映させ、準備が整った状態で全面実施の平成32年度を迎えることが必要であった。本研究は、異文化間コミュニケーションの観点から、この準備期間に必要な研究としてスタートした。

2. 研究の目的

グローバル化に対応した小学校英語教育としての質をより豊かにするために、本研究は言語能力と異文化間コミュニケーション能力の向上が一体化した授業の実現を目標とし、その活動デザイン、指導方法、および評価方法を追究することを目的として行った。「異文化交流と言語習得が表裏一体となった授業作りの体系化」を行うことによって、異文化交流のプロセスの中で積極的に目標言語を使いながら主体的に言語を習得する英語科教育を推進する。本研究では、小学校英語科教育における教室の枠を超えた異文化交流活動の実効性を明らかにすることを目指した。

3. 研究の方法

- (1)異文化交流活動のデザイン、(2)指導方法、(3)評価方法の3つの観点から研究を進めた。
- (1) 異文化間交流活動のデザインについて：Byram (1997, 2008, 2009)のintercultural communicative competence (ICC) を理論的枠組みとして、具体的な活動をデザインする。活動をデザインするにあたり、児童の異文化理解に対する変容と英語能力の伸びを促進することが可能となる活動をデザインする。デザインした活動に改善を加えながら体系化を目指す。観察、インタビュー、アンケート、ポートフォリオを用いた調査と分析により、工夫し改善すべき点を明らかにしながらより良い活動をデザインしていく。
 - (2) 指導方法について：言語能力の育成については、意味を重視しながら必要に応じて形式に注意を向けるフォーカス・オン・フォームを異文化間交流の指導に取り入れられるような工夫を試みる。異文化間コミュニケーション能力の育成については、オーストラリアの小学校との交流による児童の動機付けや情緒面の変容について調査する。
 - (3) 評価方法について：行動観察評価、自己評価、パフォーマンス評価、ポートフォリオ等の複数の評価方法を相互に関連させた分析を行い、総合的な評価方法を試みることにした。

4. 研究成果

(1)異文化間交流活動のデザインについて

異文化間交流活動をデザインする上で、理論的枠組みを設定することは欠かせない。理論的研究を進めた結果、Byram (1997, 2008, 2009)の提案するintercultural communicative competence (ICC) を本研究の理論的枠組みとすることとした。ICCIは、外国語学習者の目指すべきモデルをnative speaker (NS=母語話者)とせず、より包括的な概念を指す。だからといってlinguistic competence(言語能力)を疎かにしているわけではなく、linguistic competence, sociolinguistic competence, discourse competenceにintercultural competenceを併せ、相互関連させながら総合的に駆使する能力の育成を提案するものである。

Byramのintercultural communicative competenceをもとに小学校の実践場面で運用しやすいよう、「異文化間コミュニケーションは言語能力をも伸ばす要素を兼ね備える場」と簡略化した定義を実践的研究の柱に設定し、下記の4点を研究の方向性に据えた。(1)異文化間コミュニケーションを言語能力育成の指導方法(手段)と限定して捉えない(コミュニケーション自体が主目的であり、初めから言語習得の手段としない)。(2)地球規模で活動することができる人材育成の教育的指導方法として捉え直す。(3)教育的指導方法という枠組みの中で、異文化間コミュニケーションを「言語能力をも伸ばす要素を兼ね備える場」と捉え直す。(4)異文化間コミュニケーションが学習者に与える影響を効果的に利用した指導方法と評価により、学習者が自律的に言語能力を伸ばすよう仕向ける。

(2) 指導方法について

手始めとして、日本とオーストラリアの小学生の交流授業を録画しトランスクリプトして、現在の授業がどのような特色を帯びているか、会話分析の手法を用いて明らかにしようと試みた。交流を楽しむ情緒的側面における効果を保持しながら、意味から形式へ注意を向けるフォーカス・オン・フォームの方法について具体的に考えるデータを得ることができた。

また、2年目の平成29年度より、Skype接続の合同授業のみに限定せず、絵本を用いた異文化交流を含むタスクのデザインおよび地域と連携した短期型異文化交流を含み、異文化間コミュ

ニケーションを「自律的外国語学習へとつながるコミュニケーションの場」と捉え直して研究を進めた。

平成30年6月末からオーストラリアのパースにあるBeechboro Christian Schoolと、「ポスおばあちゃんのまほう」という絵本を題材に、言語習得と異文化交流を促進する合同授業のデザインをメールにより進めた。9月中旬にオーストラリア側の事情により休止状態となったが、2019年度に合同授業を実現する予定である。絵本を用いた異文化交流を含むタスクのデザインである。約3ヶ月にわたってオーストラリアの小学校と絵本を活用した異文化交流による第二言語習得の授業のデザインを充実した形で進めたことに手ごたえを実感し、国立国会図書館国際子ども図書館の児童書研究資料室や宮城県図書館を中心に、絵本専門店や日本国際児童図書評議会(JBBY)等から、外国で刊行された絵本と日本の絵本についての資料収集を行い、タスクに適切な絵本の選書を行いタスクのデザインを試みた。

地域と連携した短期型異文化交流である。1泊2日の事業の中で、iPadを用いたフィリピンの高校生との遠隔交流を実施した。ICTを用いた地域に根差す異文化交流であったが、充実した実践となるにはきめ細やかな工夫とデザインが必要であった。

(3) 評価方法について

行動観察評価、自己評価、パフォーマンス評価、ポートフォリオの4つの評価方法のうち、自己評価の実態を調査するに留まり、本研究においては評価方法については十分な研究はなされたいとは言えない。

(4) 今後の展望

異文化交流による第二言語習得の実現は、地球市民として育つことを期待される小学生にとって重要であり、更なる研究の発展が望まれる。「自律的外国語学習へとつながるコミュニケーションの場」を創出し実効性を旨とした本研究は、課題を明確にできた点で意義を持ち、今後の研究への確かな足掛かりを築いたといえる。特に、絵本は、異文化とインプットの観点から質の高い素材であると実感できた。異文化間コミュニケーションを絵本を素材に展開し、「異文化交流と言語習得が表裏一体となった授業作り」を小中高大のいずれの段階においても充実させていくことは、地球市民教育としての英語科教育を発展させることにもつながると期待できる。

<引用文献>

- Byram, M. (1997). Teaching and assessing intercultural communicative competence. Bristol, USA: Multilingual Matters.
- Byram, M. (2008). From foreign language education to education for intercultural citizenship: Essays and reflections. Clevedon, UK: Multilingual Matters.
- Byram, M. (2009). Intercultural competence in foreign languages: The intercultural speaker and the pedagogy of foreign language education. In D.K. Deardorff (Ed.), The Sage handbook of intercultural competence (pp. 321-332). SAGE Publications.

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 3 件)

- 佐々木雅子・斉藤万由子・椎名哲平・仲西小春 (2018). 「絵本を活用した小学校英語の授業デザイン：タスクと異文化理解の視点から」『秋田英語英文学』第59号, 1-11. 査読有
- 若有保彦・佐々木雅子・パターソン・エイドリアン・佐々木和貴・村上東・星宏人 (2018). 「小学校英語担当教員養成の取り組み 「小学校英語教科化に向けた専門性向上のための講習の開発・実施事業」2年目を終えての成果と課題」『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』第40号, 45-56. 査読有
- Sasaki, M. & Shimizu, T. (2017). Elementary school students' intercultural communication for intercultural communicative competence. 東北英語教育学会研究紀要 (TELES Journal), 37, 123-135. 査読有

[学会発表](計 7 件)

- Sasaki, M. (2019). "Methodological exploration with a picture book for Japanese university students' intercultural communicative competence" The Second J-CLIL Tohoku Chapter Conference
- 佐々木雅子 (2018). 「異文化間コミュニケーションと第二言語習得」小学校英語教育フォーラム (弘前大学) (招待講演)
- 佐々木雅子 (2018). 「絵本を素材とした異文化間交流を含むタスクを用いた授業デザイン」第44回全国英語教育学会 京都研究大会
- Sasaki, M. (2018). "CLIL for furusato education" The First J-CLIL Tohoku Chapter Conference
- 佐々木雅子 (2017). 「Intercultural oral communication via Skype: Between Japanese

elementary school students and Australian primary school students」日本児童英語教育学会第37回秋季研究大会

Sasaki, M. (2017). “ Intercultural oral communication project for pre-service English teacher education ” the Eighth Pacific Rim Conference on Education (国際学会)

佐々木雅子・小番雅和 (2016). 「 小学校英語における異文化間交流 」第16回小学校英語教育学会 (JES) 宮城大会

〔 図書 〕 (計 0 件)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。